



地図にも書かれている日本の名前

それでは北方領土の歴史を振り返ってみましょう。日本が北方の島々のことを知ったのは、一七世紀のはじめ頃のことです。これは松前藩の「新羅の記録」で明らかになっています。

現存する地図のうち北方領土が表されたものも古いものでは、一六四四年（正保元年）に幕府が作成した「正保御国絵図」があります。この中にすでに「くなしり」「えとほろ」などの島々の名前が書かれています。

択捉島に建てられた日本領土の標柱

一八世紀後半になると、国後島、択捉島を中心に、もがみとくない 最上徳内、こんどうじゅうぞう 近藤重蔵、たかたやかへい 高田屋嘉兵衛のような勇敢な日本人が活躍しました。

幕府は一七八五年（天明五年）から、最上徳内を国後島と択捉島に派遣し、現地のようなすくわしく調べさせるとともに、また、一七九八年（寛政十年）には、大規模な調査隊を派遣し、このとき近藤重蔵が最上徳内とともに択捉島に渡り、「大日本東密宮府」と書いた標柱を建てました。さらに一七九九年（寛政十一年）には高田屋嘉兵衛が、苦心の末、国後、択捉島間に航路を開きました。

このように北方領土は古来からの日本の領土なのです。

